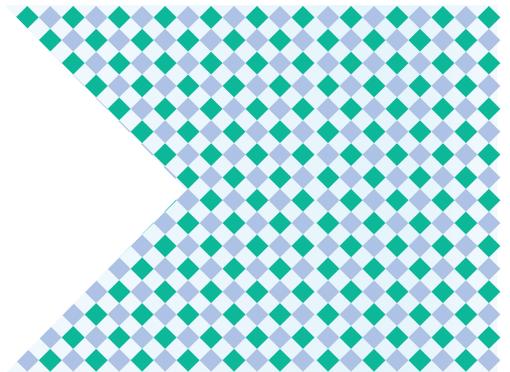


GPN

Column

グリーン購入ネットワーク コラム Vol.1



新型コロナウイルスとグリーン購入

伊坪 徳宏

(GPN代表理事／東京都市大学環境学部教授／東京都市大学大学院環境情報学研究所長
／東京大学生産技術研究所客員教授)

■ふたつの非常事態宣言

昨年の12月、「気候非常事態宣言」をテーマにしたセミナーを東京ビッグサイトで開催しました。いま気候非常事態を宣言している自治体は世界全体で1,700を超えます。日本でも老朽市が2019年9月に宣言して以来、鎌倉市(同年10月)、白馬村(同年12月)が宣言したのを皮切りに、大阪市、長野県、神奈川県など32の自治体が宣言しています。気候非常事態宣言は英語で表すとClimate Emergency Declarationで、これを略したものがCEDです。セミナー当日は小池東京都知事や山口公明党代表が登壇され、約400名が来場しました。主催者として2020年のキーワードはCEDになるという一種の高揚感を感じました。

その後、新型コロナウイルス禍に世界は突入しました。世界の感染者数は1,700万人を超え、死者数は67万人を超えました(2020年7月31日現在)。日本は他国に比べて被害の程度は低いものの死者数は1,000人を超えています。非常事態宣言に伴う行動制限、観光業・飲食業を始めとした生産活動の停滞、働き方改革と相まったオンライン化の急速な浸透は、私たちの生活を一変させましたが、同時に気候変動や環境問題に対する関心も吹き飛んだようにも見えます。いまや、CEDはCOVID Emergency Declarationになっているようです。

■新型コロナウイルスと環境問題

COVID-19は野生動物からヒトに感染する人獣共通感染症のひとつであり、センザンコウの密猟に端を発している

という説が有力です(Lam et al. 2020)。COVID-19に限らず、人類がこれまで経験した、もしくは、今なお苦しんでいる感染症の3/4は人獣共通感染症です。エボラ出血熱、鳥インフルエンザ、MERS、SARS、ジカウィルスはいずれも別の種類の動物を経由した感染によるものです。資源採取、農地開拓、移住などを通じてヒトが自然生態系に介入すればするほど、野生動物から人間が病原体に感染する確率が高まります。COVID-19もヒトがマレーシアの野生動物を採取したことが発端であるとすれば、これは厄災というより人災といえます。

ウィルスがヒトへと感染するのを防ぐ重要な鍵は生物多様性です。天然林を皆伐してモノカルチャー化したり、鶏や豚など単一の種を多数牧草地に飼育したりする環境は、感染症が広がりやすい状況であると言えます。気候条件が変われば、病原体の数や分布状況が変化したり、生態系の変化を通して新たな感染爆発につながり得ることがわかっています。このように、いま起きているCOVID-19の感染爆発は環境問題と密接に関係していることがわかります。アフターコロナの対処方法に関する議論や提案が各方面から起きていますが、次の感染爆発を回避する重要な対策は環境にあることは疑いがないと思います。

ウィルスの特徴は、「基礎再生産数」と「致命率」で表現されます。COVID-19の「基礎再生産数」はおおよそ2~3で、年齢層によって異なりますが致命率は高く5%程度です。これと近い特徴を持っているものはスペイン風邪です。感

[続きはGPN会員専用ページからご覧いただけます。](#)